

ヒツジのラブシーズン

写真・文 平田昌弘

全ての事には時がある
 交尾するに時があり
 出産するに時がある
 摺乳するに時があり
 乳加工するに時がある

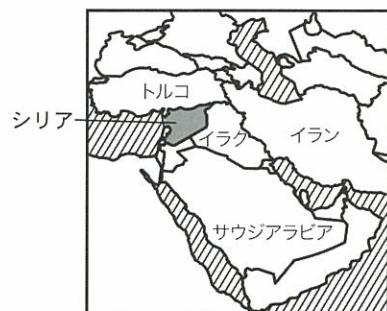


写真1 ヒツジの交尾
 日が短くなってくると交尾が始まる。



写真2 ヒツジの誕生
 仔ヒツジにヘその緒がまとわり付いている。母ヒツジは仔ヒツジをなめ回す時、仔ヒツジの匂いを脳に刷り込ませる。

シリアルの夏は暑い。そして極度に乾燥している

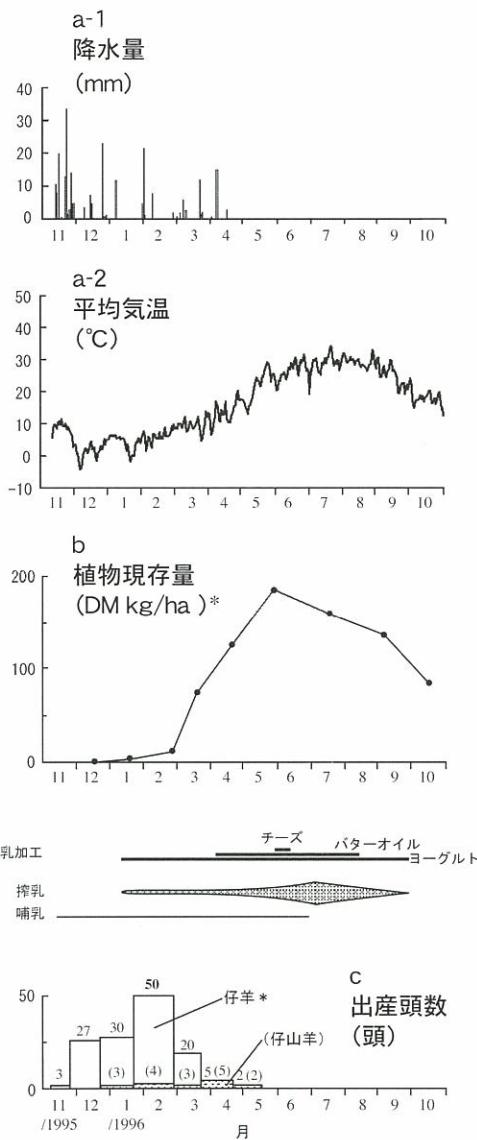
乾季の炎天下にたたずむだけでも体力が奪われてしまう。こんな乾季の厳しい時期に、ヒツジの子供達が生まれてくるはずがない。仔畜が健やかに育たなければ種は絶えてしまう。気候風土の厳しい地域であるが故、仔畜は一年で最も自然環境の良い時期に生まれてくるはずだ。この問題提起を確かめたいと思い、シリアル北東部、アブダルアジズ山地域(前号参照)に入り込み、降水量、気温、植物量、仔畜の出生頭数の関係を調べてみた(p.29の図参照)。

それが実現したのは1995年。A世帯に泊まり込み、牧畜民と生活と共にしつつ、自然環境を測り、ヒツジのラブシーズンを1年かけて追いかけられるなんて、なんたる贅沢な調査だろうか。

※降水量と気温とは自動気象観測機で30分毎に、植物現存量は毎月、草本植物の地上部を単位面積当たり刈取りし、乾物重を測定した。出産頭数は、生まれた仔畜を毎日数え、月単位で集計。調査した牧畜民A世帯は、羊を210頭、山羊を40頭飼養していた。

仔ヒツジは冬まだ寒い2月に生まれる

シリアルは地中海性気候にある。11月から4月が雨季、5月から10月は乾季となり雨が全く降らない(p.29の図a-1)。気温は雨季に0℃以下と寒く、乾季に最高気温40℃以上の猛暑となる(図a-2)。家畜の餌となる植物は、雨季の降雨に敏感に反応して生育を始める。1995年、植物の新芽が出始めたのは11月下旬であった。しかし、平均気温が11月から2月は0℃前後そのため、植物たちはほとんど生育しない。3月4月は日本でいう春の季節となり、麗らかな天候の元、冬の束縛から解放されたかのように植物は一斉に伸びだす(図b)。植物の若葉が生え、植物量が多くなるこの時期、家畜にとって自然環境は一年のうちで最も良くなる。



シリア北東部、アブダルアジズ山地域における
降水量(a-1)、気温(a-2)、草本植物の現存量(b)と
牧畜民A世帯の出産頭数、哺乳、搾乳、乳加工(c)。

*: ヘクタール ha 当りの乾物重量 DMでの植物現存量 kg

この3月4月にヒツジの仔畜産が生まれてくるかと思われたが、実は少しずれていたのだ。ヒツジのラブシーズンは8月から9月にかけて、ヤギは10月が主である。ヒツジもヤギも短日繁殖動物であり、日が短くなってくると発情し、交尾にいたる。(写真1)ヒツジもヤギも妊娠期間5ヶ月を経て、仔ヒツジが誕生するのは主に1月から2月にかけて、仔ヤギは主に3月から4月にかけてである(図c)(写真2)。ヤギの仔畜は、環境条件の最も良い3月から4月に合わせて誕生している。しかし、ヒツジの仔畜はそれより約1ヶ月程前、草資源の状態が未だ良くない時期に誕生のピークを迎えているのだ。これは一体どうしたことだろうか。「仔畜は一年で最も自然環境の良い時期に生まれてくるはずだ」とする仮説は間違っているのだろうか。

仔ヒツジが離乳する頃、春を迎える

この疑問は、ヒツジの仔と親の関係を観察していたら、直ぐに解決した。仔畜は出生後しばらくは母畜から乳を飲む。仔畜が本格的に草を喰むようになりだすのは約1ヶ月してからだったのだ。2月から1ヶ月後の3月、ちょうど植物が一斉に伸びだして、一年で最も植生状態が良くなっている。シリア北東部では、最も環境条件の良い時にヒツジの仔畜が誕生しているのではなく、仔畜が草を喰むようになりだす頃が最も環境条件の良くなるように誕生していたのであった。ヒツジの季節繁殖のタイミングが、ここまで深く地域の自然環境に根ざしていたことを突き付けられると、ヒツジはもともとは地中海地域起源の動物であり、地中海地域で人々の生活と共に育まれた家畜であるという歴史を感じずにはいられなかった。

ヒトは仔ヒツジからミルクを横取りして生きている

出生後の最初の数日間、母仔は共に放牧し、仔畜は母畜から好きな時に、好きなだけミルクを飲む(次頁写真3)。だが、この幸せな母仔関係は、この最初の数日だけなのだ。それ以後は、人間の食料生産のためにヒツジの母仔関係が切りきざまれることとなる。



写真3 ヒツジの哺乳

母ヒツジは自分の仔ヒツジの匂いを嗅ぎ分け、自分の仔ヒツジにのみミルクを与える。



写真5 母仔ヒツジの隔離作業

母ヒツジが仔ヒツジに哺乳しないように母子を隔離する。



写真6 仔ヤギの口かせ

仔ヤギが母ヤギの乳を飲まないようにする。

搾乳は、出生後3日から20日してから開始される(写真4)。初めに搾乳をしてから、後に哺乳が行われる。仔畜に哺乳させた後、母仔を引き離し(写真5)、別々の群にして放牧に出す。

一緒に放牧に出すと、仔畜が母畜のミルクを飲んでしまい、ヒトのためのミルクが横取りできなくなるためだ。夕方、放牧から戻り、搾乳後、母仔は数分間面会することができ、仔畜は母畜から残り乳を飲む。母仔のしばしの幸せの一瞬。たった数分間の面会・哺乳、その後、母仔は再び引き離され別々に夜を過ごすこととなる。

更に悲劇なことに、仔畜への哺乳が出生後3ヶ月齢までは続けられるが、その後は母仔が完全に隔離される。母仔を完全に隔離するのは、仔畜がもうミルクを飲む必要がなくなったこともあるが、母仔認識を消滅させるために行われる。母畜は自分の仔畜にしかミルクを与えない。何十頭も仔畜が群れる中で、自分の仔畜を瞬時に見分ける選別力は、感動に近いものがある。この母畜の選別力を無くせば、一緒に放牧しても仔畜は母畜からミルクを飲むことができなくなる。母群と仔群を別々に放牧しなくても済む分、ヒトの労働量が半減されることになる。そこで牧畜民は、仔畜が3ヶ月齢に達したら、母仔隔離を行い、母仔認識を消滅させようとするのだ。母仔隔離を最低2ヶ月行えば、大多数の母仔関係は消滅するという。ヒトの生産活動にとって、ヒツジの長く続く母仔関係は必要としていないのだ。ただし、中には母子関係を認識し続けている個体もあり、そんな場合は、仔畜に口かせをはめるか(写真6)、母畜にブラジャーを付けて(写真7)ミルクを飲まないようにさせる。

搾乳は12月下旬から9月下旬まで続けられ、搾乳量は6月下旬から7月上旬にかけてが最も多い。1996年、母畜から搾乳した最後の日は、ヒツジでは8月2日、ヤギでは9月20日であり、ヤギの方が約1ヶ月ほど遅くまで搾乳している。放牧する際、ヤギは群から外れることが多く、群管理においてはヒツジよりも手間のかかる家畜である。どうして群にヤギを入れているのか、従順なヒツジだけにした方が群を管理しやすいのにと不思議に思ったものだったが、その理由がここにある。食料生産の長期化のためだったのだ。ヒツジの群にヤギを混入させることで、搾乳期間が長期化するのだ。調査したアラブ系牧畜民バッガーラ部族は、肉を食するよりもミルクを食して生活を送っている。

ミルクに頼って、彼らは生き抜き、命を繋いでいるのだ。少しでもミルクを搾っていたい。乾季の終わり世の中が茶色に干上がった場で、バッガーラの人々の気持ちが痛い程に心に伝わってきた。



写真4 ヒツジの搾乳
数世帯のヒツジが一緒になって放牧しても、搾乳は世帯ごとに必ず行う。

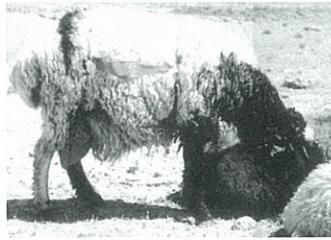


写真7 母ヒツジのブラジャー
母ヒツジが仔ヒツジに哺乳できないようにする。

1月～9月、絞った乳を加工して人は生を繋いできた

このように、ヒツジやヤギの搾乳は1月から9月までと季節的な偏りが生じている。では、一時期に沢山生産される生乳をどうするか、乳の非生産時期にはどうするかである。それは、長期にわたり生乳を保存できる形態に姿を変えることである。図から分かるように、搾乳期間にヨーグルトが作られている。搾乳量が多くなり、毎日食べる自家消費用のヨーグルトを除いて、一定のまとまった量が得られると、ヨーグルトからバターオイルが作られるようになる。レンネット添加によるチーズ作りは、5月下旬から6月にかけての約10日だけ、自家消費用に作られている。搾乳の季節的な偏りに加え、搾乳した生乳を加工する内容にも季節的な偏りが生じている。生産するにも時があり、加工する内容にも時が有ったのである。そんな季節性は、地中海性気候という地域の生態環境の基盤の上に育まれていたのであった。

保存食とはすべて、非生産時への備えである

チーズやバターオイルなどの乳製品は、嗜好風味をこらした乳製品であると同時に、「保存された食」として位置づけることができる。中尾佐助は名著『料理の起源(1972:278-279)』の中で、「乳加工の体系は全て貯蔵のためという目的に収斂し、貯蔵を抜きにして食品の加工体系の中心にある原動力がなくなる」と述べている。谷泰も『乳利用の民族誌(1992:279)』で、乳の場合、一年中搾乳できる状態でないから、特に貯蔵加工がきわめて重要なことだとしている。本来、保存食とは、季節的に大量生産される食糧を腐らせるうことなく、非生産時期にまでいかに備えておくことができるか、その試行錯誤の繰り返しの過程で生まれてきたものである。家畜の飼養に依存した社会が形成されることは環境要因に大きく影響されている。しかし、家畜から産出された畜産物を処理する段階では、そこで生業を営む人の所有する技術に大きく影響されることであろう。

次回は、乳という素材を対象に、バッガーラの保存性を高める方法について紹介しようと思っている。

参考文献

- ・中尾佐助、1972『料理の起源』
日本放送出版協会
- ・谷泰・石毛直道・中尾佐助・
和仁皓明、1992
『乳食文化の系譜』
- ・石毛直道・和仁皓明編著
『乳利用の民族誌』
中央法規出版、267-292

平田昌弘プロフィール

1967年に福井の小浜に生まれる。少年時代は山登りとテニスに明け暮れる。大学院在学中に休学し青年海外協力隊に参加。シリアでヒツジの魅力に出会う。現在は日本のヒツジを追いかけている。
県立広島大学畜産学部助教授